常磐松文庫蔵　奈良絵本栄花物語　三冊

横井　孝

一　概略

本学には奈良絵本・絵巻を少なからず収蔵しており、これまでの展覧会などにいくつかを紹介してきた。本書もそのひとつ。能筆によるとおぼしい詞書を主とし、極彩美麗の挿画を配する絵入り本であり、豪華な装丁からも嫁入り本の類ではないかと思われる。

いうまでもなく原作『栄花物語』は全四〇巻の長篇歴史物語だが、本学所蔵の該本は、その冒頭、巻第一「月のえむ（宴）」、巻第二「花山たつぬる中納言」、巻第三「さま〳〵のよろこひ」の三巻三冊のみ。もとは四〇冊揃いであったかとも推察されるが、現在のところツレの消息を聞かない。簡略な書誌を左にあげておく。

実践女子大学図書館常磐松文庫蔵『栄花物語』略書誌

〔形態〕 写本、袋綴、三冊。
〔寸法〕 縦二一・〇糎、横一七・七糎。
〔表紙〕 紺地に金銀糸の唐草文様表紙。
〔外題〕 表紙中央に金砂子で装飾した題簽に「月のえむ一」「花山たつぬる中納言二」「さま〳〵のよろこひ三」と墨書。本文と別筆。
〔内題〕 各巻一丁オモテ第一行目に二字ほど下げて「月のえん」「花山」「さま〳〵のよろこひ」とあり。
〔料紙〕 鳥の子紙。
〔奥書・識語〕 なし。
〔印記〕 なし。各巻頭・巻尾に現蔵者印のみ。
〔その他〕 表紙右肩に「絵五」と墨書した紙片が貼付してある。旧蔵者の整理番号であろう。

二 本 文

現存三巻の本文は、すべて省略せずに書写されている。本文系統はまったくの流布本であり、版本の本文との関係を考慮すべきかと思われる。いま明暦版本と比較しても、ほとんど異同がない。巻一の一丁ウラで例示してみよう。本行は本書の本文。傍線は明暦版本の表記の相違箇所、括弧内が版本の本文表記であることを示す。

……そのころの太政大臣（太じやう大じん）もとつねのおと、とき

こえけるは宇多（うだ）のみかとのおほんときうせ給
ける中納言（中なごん）長良ときこえけるは太政大臣（太じやう大じん）冬嗣
の御太郎にそおはしける……
……太郎はときひらときこえけり左大臣（さ大じん）まて
なり給て卅九にてうせ給にけり二郎仲平と
きこえけり左大臣（さだいじん）までなり給て七十一にてうせ

要するに、ほとんどの異同は、かな・漢字の表記の差異に過ぎないということである。本稿は、実態を見ていただくため、巻一「月のえむ」のみを翻刻することにしたが、他巻も同様な状況と理解して差し支えない。したがって、校異をあげることもしなかった。

巻一本文の版本とのおおきな異同は四箇所を数えるが、その一は、二七ウ1行目～2行目に、

給へなときこえ給へはあへいことにもあらすお
おほんことにもあらさなるをなとはすかしけにき

とある部分。明暦版本では「……あべいことにもあらずおぼしたれば。いまはじめたるおほんことにもあらさなるを……」とあり、いま仮に傍線を施した部分があり、おそらく「あらずおほ……」「おほんこと……」の目移りで該本が脱落させたものと考えられる。

また、三〇丁ウラ5行目～6行目、

……きさいの宮おはしまし丶九のみやな
とのおほんたいめんありしなところそ……

とある箇所、版本では「おはしまし、おり。九のみやなどの」とあり、「おり」があるべき箇所と思われる。
右と同様な例は、四四丁ウラ1行目、

……せんさいうへ木とも、まかせておひ……

とあるのは版本に「せんさい。うゑきともも。こころにまかせて」とある。またさらに、五六丁オモテ10行目、

（……有さまあさま）しうおかしうなる（以下空白）

とあるのは、「おかしうなん」とあるべきところだろう。いずれも該本の独自異文であり、独自の誤謬であろうと思われる。

三　挿　画

現存三巻の挿画は全一四図。各巻のうちわけは次のとおり。

巻一・五図
巻二・五図
巻三・四図

すべて見開きに極彩色で描く。今回は巻一の分だけ挿絵のカラー図版を口絵として掲げておいた。
第一図（一〇ウ～一一オ）……宣耀殿の女御芳子の弾琴の情景。女御のすぐ脇にいるのは天皇か。離れて座する衣冠の男は女御の兄弟の済時か。挿絵直前の一〇オモテの場面を絵画化した。
第二図（三三ウ～三四オ）……康保三年八月十五夜の月の宴。御簾奥に天皇の姿があり、その前に「すはまをゑ

にかき」「おもしろきすはまをゑり」というものが並べられている。本文に「うたはをみなへしにそつけたる」とあるが、それは見えない。

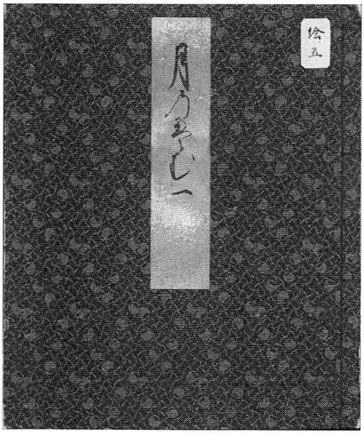
第三図（四六ウ～四七オ）……童形の天皇、「ふりつづみ」に興ずる場面。安和二年の年末、追儺の一情景。

第四図（五二ウ～五三オ）……村上天皇八の宮・永平親王、乗馬に醜態を見せる場面。馬の背中にしがみつくのが八の宮。抱きおろそうとしている烏帽子姿の男は世話役の宰相（済時）か。

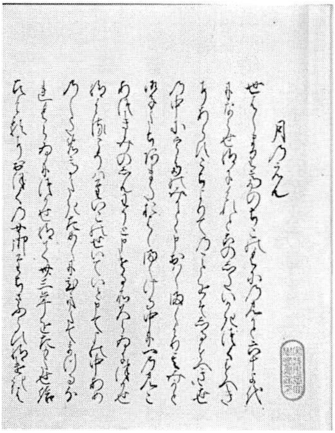
第五図（五六ウ～五七オ）……八の宮、昌子内親王に時節外れの挨拶をして、女房達の失笑を買う場面。童姿で座するのが八の宮。

ちなみに、『別冊年報』Ⅻ号（二〇〇九年三月）に本研究所架蔵の絵入版本『栄花物語』巻一～三の翻刻と影印を掲載しているので、該本の挿絵などと比較していただきたい。

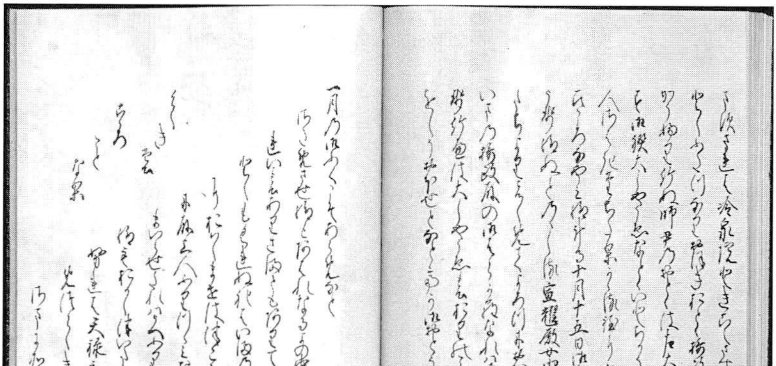
絵入版本は「月の宴」には四図を挿入するが、その第二図は当該絵本の第二図と同じ場面を見開きで挿絵とし（一二ウ～一三オ）、第四図も該絵本第四図の永平親王の乗馬の醜態の場面を描く（一八オ）。構図がややことなるため、両者の直接的な関係を見出すことはむずかしい。



〔図1〕巻一表紙



〔図2〕巻一・本文冒頭



〔図3〕巻一・散らし書き

凡例

以下、実践女子大学図書館常磐松文庫蔵『栄花物語』全三冊のうち、第一巻「月のえむ一」を、なるべく原態に忠実に翻刻することとした。

一、改行、改丁は当該絵本のままとした。丁の表裏、改丁などは　」　印で示し、」（一オ）の如くに記した。

二、字体は通行の活字体とした。

三、明暦二年版本・絵入版本の本文を参照したが、右略解題に記したように、かならずしも厳密な校異欄を必要とする本文ではないと判断した。そのため、改行などは保存するが、二段組みに追い込んで活字化した。

四、本巻の挿絵は、口絵としてカラー図版を別に示した。また、表紙・本文の状況は前ページの写真で代表することとした。今回は紙幅の関係もあって、すべての影印を示すことは省略した。

月のえん

世はしまりてのちこのくにのみかと六十よ代
にならせ給にけれとこのしたいかきつくすへき
にあらすこちよりてのことをそしるすへき世
の中に宇多のみかと、申おはしましけり其みかと
御子たちあまたおはしましける中に一のみこ
あつきみのしんわうと申けるそくらゐにつかせ
給けるこそはたいこのせいていと申てよの中あめ
のしためてたきためしにひきたてまつるな
れくらゐにつかせ給て卅三年をたもたせ給
ひけるにおほくの女御たちさふらひ給けれは」（一オ）
おとこみこ十六人をんなみこあまたおはしまし
けりそのころの太政大臣もとつねのおと、とき
こえけるは宇多のみかとのおほんときうせ給
ける中納言長良ときこえけるは太政大臣冬嗣
の御太郎にそおはしけるのちは贈太政大臣とそ
きこえけるかの御三郎にそおはしけるそのもとつ
ねのおと、うせ給てのちの御謚昭宣公ときこえ
けりそのもとつねのおと、おとこきみ四人おはし
けり太郎はときひらときこえけり左大臣まて
なり給て卅九にてうせ給にけり二郎仲平と
きこえけり左大臣までなり給て七十一にてうせ
給にけり三郎兼平ときこえけり三位までそお」（一ウ）
はしける四郎たゝひらのおと、ぞ太政大臣まで
なり給ておほくのとしころすくさせ給けるその
もとつねのおと、の御女の女御のおほんはらにたいこ
のみやたちあまたおはしましける十一のみこ寛明
しんわうと申けるみかとにゐさせ給て十六年
おはしましてのちにおりさせ給ておはしけるを
そ朱雀院のみかと、は申けるそのつきおなし
女御のおほんはらの十四のみこ成明のしんわうと申
けるさしつゝきてみかとにゐさせ給にけりてん
けい九年四月十三日にそゐさせ給ける朱雀院」（二オ）
は御子たちおはしまさゝりたゝ王女御ときこえ
ける御はらにえもいはすうつくしきをんなみこ
一所そおはしましけるはゝ女御も御子みつにて

うせ給にしかはみかとわれひと、ころ心くるし
き物にやしなひたてまつり給けるいかてきさ
きにすへたてまつらんとおほしけれとれいなき
ことにてくちおしくてそすくさせ給ける昌子
内親王とそきこえさせける。かくていまのうへの
おほん心はへあらまほしくあるへきかきりおは
しましけりたいこのせいていよにめてたく
おはしましける又このみかと堯の子の堯なら」（二ウ）
ぬやうにおほかた御心はへをしうけたかく
かしこうおはしますものから御さえもかきり
なしわかのかたにもいみしうしませ給へりよろつ
になさけありもの、はへおはしましそこらの
女御みやすところまいりあつまり給へるをとき
あるもときなきもおほんこ、ろさしのほとこよな
けれといさ、かはちかましけにもてなしなと
もせさせ給はすなのめになさけ有てめて
たうおほしめしわたしてなたらかにをきてさ
せ給へはこの女御宮す所たちのおほんなかもいと
めやすくひんなきこときこえずくせ〳〵しからす」（三オ）
なとして御子むまれ給へるはさるかたにおも〳〵
しくもてなさせ給さらぬはさへうおほんものわ
すれなとにてつれ〳〵におほしめさる、日なとは
おまへにめしいて、こすくろくうたせへんをつかせ
いしなとりをせさせて御らんしなとまてそおは
しましけれはみなかたみになさけをかはしおかしう
なんおはしあひけるかくみかとのおほん心のめてた
けれはふくかせもえたをならさすなとあれはにや
はるのはなもにほひのとけく秋のもみぢも枝に
と、まりいと心のとかなる御ありさまなりた、今
の太政大臣にてはもとつねのおと、のみこ四郎」（三ウ）
た、ひらのおと、みかとのおほんをちにて世を
まつりこちておはすそのおと、のみこ五人そおは
しける太郎はいまの左大臣にてさねよりときこ
えてをの、みやといふところにすみ給二郎は

右大臣にてもろすけのおと〻九条といふところに
すみ給三郎の御ありさまおほつかなし四郎
もろうちときこえける大納言までそなり給
ける五郎師尹の左大臣ときこえてこ一てうと
いふところにすみ給されはた〻いまはこのおほき
おと〻の御子ともやかていとやむことなきとのはら
にておはするなかに九条のもろすけのおと〻」（四オ）
いとたはしくおはしてあまたのきたのかたの御
はらにおとこ十一人をんな六人そおはしけるをの〻
みやの左大臣殿はおのこきみ三人はかりそおはし
けるをんなきみもおはしけり一所はみやはらの具
にておはすさしつきは女御にておはしけりつき
〳〵さま〳〵にておはす。小一てうの師尹のおと〻を
のこ〻二人をんなひと〻ころそおはしけるをのこ子
一人ははかなうなり給にけりかくてにようこたち
あまたまいり給へる中に九条のもろすけのお
と〻のひめきみあるかなかに一の女御にてさふらひ
給又いまのみかとの御はらからの重明の式部卿宮
のおほんむすめ女御にておはす又おなし御はら
からの代明のなかつかさのみや御むすめ麗景殿
女御とてさふらひ給又在衡のあせち大納言のむす
めあせちの御息所とてさふらひ給小一てうの師尹
のおと〻の御むすめいみしううつくしくて宣耀
殿の女御ときこえさす又廣幡の中納言庶明の
おほんむすめ廣幡のみやすどころとておはすさて
もこのおほんかた〳〵みなみこむまれ給へるもあり
みこむまれ給はぬみやすところたちもあまた
さふらひ給まこともとかたみんふきやうのむすめも
まいり給へりとしころ東宮もかくふた〻ひうせ」（五オ）
給ぬるにたうくうかくゐさせ給はぬにこ〻らさふ
らひ給おほんかた〳〵あやしう心もとなくみこむ
まれ給はざりけるほどに九条殿の女御た〻にも
おはしまさてめてたしとの〻しりしかとをんな
みこにていとほいなきほとにたいらかにてたに
おはしまさてうせさせ給ぬるにもとかたのみやす

」（四ウ）

ところた丶ならぬことのよし申てまかで給ぬれ
はもしをのこみこむまれ給へるものならは又なう
めてたかるへきことによの人申おもひたるに一の
みこむまれ給へるものかなあなめてたいみしと
の丶しりたりうちよりも御はかしよりはしめて」（五ウ）
れいのおほんさほうのこと丶もにてもてなしき
こえ給もとかたの大納言いみしとおほしたり東宮
はまたよにおはしまさぬほとなりなにのゆへにか
わかみことうくうにゐあやまち給はんとたのもし
くおほされけりいみしうよの中にの丶しるほとに
九てうとの丶にようこた丶にもおはしまさすといふ
ことをのつから世にもりきこゆれともとかたの
大納言いてさりともさきのこともありきなと
き丶おもひけりおほいとのも九てう殿もいとうれ
しうおほすほとにうへは世はともあれかうもあ
れ一のみこのおはするをうれしくたのもしきことに
」（六オ）
覚しめすことはりなりか丶るほとに太政大臣殿
月ころなやましくおほしたりつるにてんりやく三
年八月十四日うせさせ給ぬこの三十六年おと丶の
くらゐにておはしましけるをおほんとしこと
しそ七十になり給にける左右のおと丶たちも
いとまためてたくたのもしき御ありさまなり
みかとうとからぬ御なからひにてよろつかた〳〵の
おほんこともめてたくてすきもていきて女御も
御服にて出給ぬ宣耀殿の女御もおなし服
にていて給ぬこ丶ろのとかにしひのおほんこ丶ろ
ひろく世をたもたせ給へれはよの人いみしくおしみ
」（六ウ）
申のちの御謚貞信公と申けりつき〳〵のおほん
ありさまあはれにめてたくてすきもていく世
の中のことをさねよりの左大臣つかうまつり給九条
殿二の人にておはすれとなを一くるしき二とそ人に
おもひきこえさせためるか丶る程にとしもかへり
ぬれはてんりやく四年五月廿四日に九てうとの丶
女御おとこみこうみたてまつり給つうちよりはい

つしか御はかしもてまいりおほかたおほん有さま
こゝろことにめてたしよのおほえことにさはきの、
しりたりもとかたの大納言かくときくにむねふた
かる心ちしてものをたにもくはすなりにけり」（七オ）
いといみしくあさましきことをもしあやまち
つへかめるかなものおもひつきぬむねをやみ
つゝやまひつきぬる心ちしておなしくはいまはいか
てとくしなむとのみおもふそけしからぬなるや九
てうとのにはおほんうふやのほとのきしきありさま
なとまねひやらんかたなしおとゝのおほんこゝろの
うちおもひやるにさはかりめてたきことあり
なむやをのゝ宮のおとゝも一のみこよりはこれはうれ
しくおほさるへしみかとのおほんこゝろの中にも
よろつおもひなくあひかなはせ給へるさまにめて
たうおほされけりはかなふ御いかなともすきもて
」（七ウ）
いきてむまれ給て三月といふに七月廿三日に
東宮にたゝせ給ぬ九条殿はおとゝのうせ給ひ
にしをかへす〱くちおしくおほされてえいみ
あへすしほたれ給ぬ一のみこのはゝ女御のゆみす
をたにまいらてしつみてそふし給へるいみしく
ゆゝしきまてにそきこゆるはかなくてとし月
もすきてこのおほんかた〱われも〱おとらし
まけしとみなたゝならすおはしてみこたちいと
あまたいてきあつまり給ぬあせちのみやす所
おとこ三の宮女三の宮うみたてまつり給つ又
この九てうとのゝ女御おとこ四五の宮むまれ給ぬ又
」（八オ）
宣耀殿女御おとこ六八の宮むまれ給へりけれと六の
宮ははかなくなり給にけり八のみやそたいら
かにておはしける麗景殿の女御おとこ七の
みやをんな六のみやむまれ給にけり式部卿宮の
にようこをんな四のみやそうみたてまつり給
へりける廣幡みやすところをんな五の宮
むまれ給へりあせちのみやすところおとこ九
のみやむまれ給なとして又九条殿の女御

をんな七九十のみやなとあまたさしつゝき
むまれさせ給てなをこの御ありさまよに
すくれさせ給へりかくいふほとにおほかた　」（八ウ）
おとこみや九人をんなみや十人そおはしける
このおほんなかにも廣幡のみやす所そあや
しうこゝろことにこゝろはせあるさまにみかと
おほしめいたりける内よりかくなん
　あふさかもはてはゆきゝのせきもゐす
たすねてとひこきなはかへさしといふうたをお
なしやうにかゝせ給ておほんかた〳〵にたて
まつらせ給ひけるこの御返事をかた〳〵
さま〳〵に申させ給ひけるに廣幡のみやす
ところはたきものをそまいらせ給たりける
されはこそなをこゝろことにみゆれとおほし　」（九オ）
めしけりいとさこそなくともいつれのおほん
かたとかやいみしくしたてゝまいり給へりける
はしもなこそのせきもあらまほしくそおほされ
けるおほんおほえもひころにおとりにけり

とそきこえはへりし宣耀殿のにようこはいみ
しううつくしけにおはしましけれはみかとも
わかわたくしものにそいみしうおもひきこえ給
へりける御門箏の御ことをそいみしうあそはし
けるこの宣耀殿の女御にならはさせ給けれは
いとうつくしうひきとり給へりけるを女御の
御はらからのなりときの少将つねにおほん　」（九ウ）
まへにいてつゝさりけなうきゝける程に
いみしうよくひきとり給へりけれはうへいみ
しうけうせさせ給てめしいたし
つゝをしへさせ給てのち〳〵は御遊の
おり〳〵はまつめしいてゝいみしき
上手にてそものし給けるこの
とのはらの御こゝろさまとも
おなし御はらからなれと
さま〳〵こゝろ〳〵にそ
おはしける　」（一〇オ）

（挿絵１）

」（一〇ウ～一一オ）

をの丶みやのおと丶は哥をいみしくよませ給
すき〳〵しき物からおくふかくわつらはしき
おほんこ丶ろにそおはしける九条のおと丶はおいらか
にしるしらぬわかすこ丶ろひろくなとして月
ころありてまいりたる人をもた丶いま有つる
やうにけにく丶ももてなさせ給はすなとし
ていとこ丶ろやすけにおほしをきてためれは
おほとの丶人々おほくはこの九てう殿にそあつまり
ける小一条の師尹のおと丶はしるしらぬほとのう
とさむつましさもおほしおほさぬほとのけち
めさやかになとしてくせ〳〵しうそおほしをき

」（一一ウ）

てたりけるそのほとさま〳〵おかしうなん有ける
東宮やう〳〵およすけさせ給けるま丶にいみしう
うつくしうおはしますにつけても九条殿おほん
おほえいみしうめてたし又四五のみやさへおはし
ますそめてたきやか丶るほとにてんとく二年
七月廿七日にそ九条殿にようこきさきにた丶せ
給ふちはらの安子と申ていまは中宮ときこえ
さす中宮大夫にはみかとの御はらからの高明
のしんわうときこえさせしいまは源氏にて例人
になりておはするそなり給にけるつき〳〵の
みやつかさもこ丶ろことにえらひなさせ給九条殿

」（一二オ）

御けしき世にあるかひありてめてたしをの丶
みやのおと丶女御のおほんことをくちおしくお
ほしたりをの丶宮のおと丶の御太郎少将にて
敦敏とていとおほえありておはせし一とせうせ
給にしそかしそのおほんおもひにていみしく
こひしのひ給けるをあすまのかたより人かの
少将のきみにとてむまをたてまつりけれは
見給ておと丶よみ給ひける

またしらぬ人もありけりあすまちに

われもゆきてそすむへかりけるこのとの大かた
うたをこのみ給けれはいまのみかとこのかたに
」（一二ウ）
ふかくおはしましており〳〵にはこのおと丶もろとも
にそよみかはさせ給けるむかし高野の女帝の
御代天平勝寶五年には左大臣橘卿諸兄諸卿大
夫等あつまりて万葉集をえらはせ給たいこ
の先帝の御時は廿巻えりと丶のへさせ給
て世にめてたくせさせ給た丶いま丶て廿よ年
なりいにしへのいまのふるきあたらしき哥えり
と丶のへさせ給て世にめてたうせさせ給この
おほんときにはその古今にいらぬ哥をむかしのも
いまのもせんせさせ給てのちにせんすとて後撰
集といふ名をつけさせ給て又廿巻せんせさせ
」（一二ウ）
給へるそかしそれにもこのをの丶宮のおと丶の
おほんうたおほくいりためりた丶し古今には
つらゆきしよいとおかしうつくりてつかうまつ
れり後撰集にもさやうにやとおほしめしけれと
かれはそのときのつらゆきこのかたの上手にて
いにしへをひきいまをおもひゆく行末をかねておも
しろくつくりたるにいまはさやうのことにたへ
たる人なくてくちおしくおほしめしけりこの
をの丶みやのおと丶の二郎二所のこりておはし
つるを三郎右衛門督までなり給へりつるも
うせ給にけれはいまは二郎よりた丶ときこゆる
」（一三オ）
のみそおはすめるまたおほんくらゐいとあさし
うゑもんのせうのわかうて上達部になり給へり
しかかくてやみ給にしかはそれにをちて
すか〳〵しくもなしあけたてまつり給はて
右衛門尉のみこともあまたおはしける中にも三郎
をそおほちおと丶わかみこにし給てさねすけと
つけ給へりけるあつとしの少将のきみもお
のこ丶をんなこあまたもたまへりけるをこの
おほちおと丶そよろつにはく丶み給ける九条

殿のきさきの御はらからの中のきみはしけ
あきらの式部卿のみやのきたのかたにてそおは
」（一四オ）
しけるをんなきみ二人うみてかしつき給けり
かくて東宮よつにおはしましし年の三月にも
とかた大納言なくなりにしかはその〻ち一の宮
も女御もうちつ〻きうせ給にしそかしそのけに
こそはあめれ東宮いとうたてきおほんもの〻け
にてともすれはおほん心ちあやまりしけり
いと〱をしけにおはしますおり〱有けりさる
はおほんかたちうつくしうきよらにおはします
ことかきりなきにたまにきすつきたらん
やうに見えさせ給た〻いみしきことには御修法
あまた壇にてよと〻もによろつせさせ給へと」（一四ウ）
しるしなしいとなへてならぬおほんこ〻ろさま
かたちなりおほんけはひ有さまみこはつき
なとまたちいさくおはします人のおほんけはひ
ともみえきこえすまか〱しういとをしけにおは

しましけりこれをみかともきさきもいみしき
ことにおほしめしなけかせ給やう〱おほん元
服のほともちかくならせ給へれはおほんむすめ
おはする上達部みこたちはいたうけしきはみ
まし給へとかくおはしませはた〻いまさやうの
ことおほしめしかけさせ給はぬに前朱雀院の
をんなみこ又なきものにおもひかしつき聞えさせ
」（一五オ）
給しをさやうにおほしめしためるはきさきに
すへたてまつらんの御ほいなるへしされはそのみや
まいらせ給へきにさためありてこと人〱た〻
いまはおほしと〻まりにけり式部卿宮のきたの
かたはうちわたりのさるへきおりふしのおかし
きことみにはみやへかならすまいり給けるをうへ
はつかに御らんして人しれすいかて〱とおほ
しめしてきさきにせちにきこえさせ給けれは
こ〻ろくるしうてしらぬかほにて二三とはたいめ
せさせたてまつらせ給けるをうへはつかにあかす

のみおほしめしてつねになを〳〵ときこえさせ
」（一五ウ）
給けれはわさとむかへたてまつり給ひけれと
あまりはえものせさせ給はさりけるほとに
みかとさるへき女房をかよはせさせ給てしのひて
まきれ給つゝまいり給又つくもところにさる
へき御てうとともまてこゝろさしせさせ給ける
ことをのつからたひ〳〵になりてきさきのみや
もりきかせ給ていとものしき御けしきになり
にけれはうへもつゝましうおほしめしてかのきた
のかたもいとおそろしうおほしめされてそのこと
とゝまりにけりかのみやのきたのかたはおほん
かたちもこゝろもおかしういまめかしうおはしける
」（一六オ）
いろめかしうさへおはしけれはかゝることはある
なるへしみかと人しれすものおもひにおほししみ
たるかゝる程にきさきのみやもみかとも四のみや
をかきりなきものにおもひきこえさせ給けれは
そのけしきしたかひてよろつの殿上人上達部
なひきつかうまつりてもてはやしたてまつり
給ほとにやう〳〵十二三はかりにおはしませはおほん
けんふくのことおほしいそかせ給おほんむすめも
たまへる上達部はいみしうけしきはみきこえ
給にみやの大夫ときこゆる人源氏の左大将えも
いはすかしつき給ひとりむすめをさやうにと」（一六ウ）
ほのめかしきこえ給けれはみかともみやもおほん
けしきさやうにおほしけれはよろこひてよろ
つしとゝのへさせ給てやかてそのよまいり給ふ
れいのみやたちはわかさとにおはしそむることこそ
つねのことなれこれは女御更衣のやうにやかて
うちにおはしますにまいらせたてまつり給へき
さためあれはれいの女御更衣のまいりはさること
なりこれはいとめつらかにさまかはりいまめか
しうておほんけんふくのよやかてまいり給みかと
きさきの御よめあつかひのほといとおかしく
なん見えさせ給けりかゝる程にしけあきらし」（一七オ）

きふきやうの宮日比いたくわつらひ給ときこゆ
れは九条殿いかに〳〵とおほしなけくほとに
うせ給にけれはみかと人しれすいまたにとうれ
しうおほしめせとみやにそは丶かりきこえさせ
給けるおほんいみなとすきさせ給てこの四のみやを
そ一ほんしきふきやうの宮ときこえさすめるか丶る
程に九条殿なやましうおほされて御かせなと
いひておほんゆ丶てなとしてくすりきこしめ
してすくさせ給ほとにまめやかにくるしう
せさせ給へはみやもさとにいてさせ給ぬおとこきみ
たちあまたおはすれとまたはか〳〵しくおと」（一七ウ）
なしきもさすかにおはせすなかにおとなしきは中将
なとにておはするもありいかにおはすへきに
かとうちにもいみしうおほしめしなけきたり
東宮のおほんうしろみも四五のみやの御ことも
た丶このおと丶をたのもしきものにおほしめした
るにいかに〳〵とおほやけよりも御修法なとをこ
なはせ給いとめてたき御さいはひによの人も申

おもへりてんとく四年五月二日出家させ給て四日に
うせさせ給ぬおほんとし五十三た丶いまかくしも
おはしますへきほとにもあらぬにくちおしう心う
くおしみ申さぬ人なし世をしり給はんにもいと
」（一八オ）
めてたきおほんこ丶ろもちゐをとかへす〳〵
おほしまとはせ給みやおはしませはよろつかき
りなくめてたし一天下の人いつれかはみやに
なひきつかうまつらぬかあらんかくてのちの
おほんこと丶もあはれ〳〵ときこえさする程に
おほんはうしも六月十よ日にせさせ給いまはとて
うちにまいらせ給へとあれはいとあつき程すく
してとおはします右大臣には故時平のおと丶
のみこあきた丶のおと丶なり給ぬこの左のおと丶
のこりてかくおはするいとめてたし東宮の
女御もみやのおほんもの丶けのおそろしけれは
」（一八ウ）
さとかちにそおはしましけるとし月もはか

なくすきもていきておかしくめてたき世の有
さまともかきつゝけまほしけれとなにかはとて
なむ宮たちみなさま〳〵うつくしういつかた
にもおはしますをうへ左も右もとそおほしめ
さるゝかうちにもなをみやのおほんかたのみこたち
はいとこゝろことにおほしめす九条殿のいそき
たるおほんありさまかへす〳〵もくちおしういみ
しきことをそみかともきさきもおほしめしたる
よの中なにことにつけてもかはりゆくをあはれ
なることにみかともおほしめしてなをいかてとうお
」（一九オ）
りてこゝろやすきふるまひにてもありにし
かなとのみおほしめしなからさき〳〵もくらゐ
なからうせ給みかとはのち〳〵のおほん有さまいと
ところせきものにこそあれとおなしくはいとめて
たうこよなきことそかしとまて覚しめしつゝ
そすくさせ給ける式部卿宮もいまはいとようおと
なひさせ給ぬれはさとにおはしまさまほしうお
ほしめせとみかともきさきもふりかたきものに
おほしきこえさせ給ものからあやしきことは
みかとなとにはいかゝと見たてまいらせ給ことそい
てきにたるされは五の宮をそさやうにおはし」（一九ウ）
ますへきにやとそまたそれはいとおさなうおは
しますそれにつけてもおとゝのおはせまし
かはとおほしめすことおほかるへし麗景殿御方
の七宮そおかしうおほん心をきてなとちいさな
からおはしますをはゝ女御の御こゝろはへをし
はかられけりあせちの宮すところことにお
ほえなかりしかともみやたちのあまたおはし
ますにそかゝり給める式部卿宮の女御宮さへ
おはしまさねはまいり給ことといとかたしさるは
いとあてになまめかしうおはする女御をなと
つねにおもひいてさせ給おり〳〵はおほんふみそ
」（二〇オ）
たえさりけるかゝる程にきさきの宮ひところ
たゝにもおはしまさぬをいかにとおほしめさるゝ

にあやしうなやましうのみつねよりもくるしう
おほさるれはいかなることにかとわかおほん心ちに
もおほしめさるれは七壇の御修法長日御修法
おほやけかたみやかたとをこなはせ給ふたんの
御読経なとをこなはせ給しるしありておほんこゝ
ちさはやかせ給なとすれはいとうれしきことに
おほしめせは又おなしことにくるしうせさせ給
ひなとして月日すきもていく程にさとにいて
させ給をなを〳〵かくてと申させ給へとそれもおそ
」(二〇ウ)
ろしきことなりとていてさせ給ていよ〳〵おほん
いのりひまなしおほくのみやたちのおはしま
せはうへいかにとのみしつ心なくおほしまとふも
けにとのみ見えさせ給うちにはよろつにおほん
心をやりおかしきおほんあそひもこのおほんなや
みによりおほしたえていかさまにと覚したれ
はをのゝ宮おとゝいとおそろしうなをおほん心
をやりておはしましならひていたくしつませ
給へるをこゝろくるしきおほんことなりとて又お
ほんいのりなとよろつにつかうまつらせ給この
宮かくておはしませはこそよろつとゝのほりて
」(二一オ)
かたへのおほんかた〳〵もこゝろのとかにもてな
されておはすれもしともかくもおはしま
さはいかに〳〵みくるしきことおほからんと人々も
いひおもひおほんかた〳〵もいみしくおほしなけ
く〳〵しかゝるほとにおほんなやみなをおとろ〳〵
しうなりまさらせ給へはうちにもとにもこのお
ほんことをおほしなけくにうちより御つかひ
ひまもなし式部卿宮このおりさへやとてやかて
いてさせ給ひにしかはうへさま〳〵にさう〳〵しく
おほつかなきことゝもおほくおほしめす女宮
たちはなをしはしとてとゝめたてまつらせ給」(二一ウ)
へり五のみやをもおほんものゝけおそろしとて
とゝめたてまつらせ給つかへす〳〵いかなるへ
きおほん心ちにかとおほしめさるみやたちをは

さう〳〵しくおほしめさるらんにとておほん心
のいとまなけれとうへわたらせ給ひてよろつに
こゝろしらひきこえさせ給もかつはいかゝとおほし
つゝけてもおほんなみたこほれさせ給へはよくし
のはせ給へとおほんこゝろさはきせさせ給たゝ
にもあらぬにかくおはしますことをよろつより
もあやうく大事におほしめさるゝにおほん心
ちひさしうなれはいとよはくならせ給てともすれ
」(二二オ)
はきえいりぬはかりにおはしますおほんあり
さまをうちにはむつましき女房たちかはり〳〵
にまいりてみたてまつりつゝ奏すれはさま
〳〵みゝかしかましきまてのおほんいのりとも
しるし見えすいといみしきことにおほしまとふ
おほんものゝけともいとかすおほかるにもかのもと
かた大納言の霊いみしくおとろ〳〵しくいみしき
けはひにてあへてあらせたてまつるへきけし
きなし東宮をもいみしけに申おもへり東宮
もいかに〳〵とおほつかなさを思ひやりきこえさせ
給うちよりのおほんつかひよるひるわかすしき
」(二二ウ)
りてまいりつゝきたり御はらからのとのはら
きみたちこゝろをまとはし給かゝる程に
おほかたのおほん心ちよりもれいの御ことのけは
ひさへそひてくるしからせ給へはいとゝおほんしつ
らひしおほんすきやうなとそこらのそうのこゑ
さしあひたるほとにいみしうみやはいきたにせさ
せ給はすなきやうにておはしますそこらのうち
とぬるをつきをしこりてとよみたるにみこかい
〳〵となき給あなうれしとおもひてのちのおほん
ことゝもをおもひさはくほとそいみしきやとのゝ
しるほとにやかてきえいらせ給ひにけりかくいふ
」(二三オ)
ことは應和四年四月廿九日いへはおろかなりや
おもひやるへしうちのみやたちもよへそいてさせ
給へるこのたひのみやをんなにそおはしましける

みやたちまたおさなくおはしませはなにとも覚
したるましけれとおほかたのひゝきにいみしう
なかせ給式部卿宮はふしまろひなきまとはせ給
もことはりにいみしう内にもきこしめしてすへ
てなにこともおほえさせ給はす御こゑをたにおしま
せ給はすゆゝしきまてみえさせ給おほんありさま
なり東宮もおほんものゝけのこのみやにまいりた
れはれいのおほんこゝちにおはしませはいといみ
」（二三ウ）
しうかなしきことにまとはせ給もあはれにみたて
まつる人みななみたとゝめかたしあはれなり
ともをろかなりさてやはとていまみやは侍従の
命婦かねてもしかおほしゝことなれはやかてつ
かうまつるあはれれいのやうにたいらかにおはし
まさましかはこのたひはこゝろことにいかにめて
たからましといひつゝけてとのはら女房たち
なきとよみたることはりにいみしきおほんこと
なりかしかくてのみやはおはしまさんとて二日あり
てとかくしたてまつらんとおほしをきてたるに
もきしきありさまあはれにかなしういみしき
ことかきりなしうち〳〵にたてまつりつるいとけ
のおほんくるまにそたてまつるよの中のさるへき
」（二四オ）
殿上人上達部なとまいりをくりたてまつるのこ
りすくなく見えたりよろつよりも式部卿宮の
おほんくるまのしりにあゆませ給こそいといみ
しうかなしけれたてまつり給へりけるものゝさま
なとのいみしさよ香のこし火のこしなとみなある
わさなりけりすへておほんとものおとこをんな
いとうるはしきさうそくとものうへにえもいはぬも
のともをそきたるおほかたのきしき有さまい
はんかたなくおとろ〳〵しううちにも東宮にも
」（二四ウ）
みなおほんふくあるへけれは諒闇たちたれとこれ
は殿上人なともうすにひをそきたる夏の夜も
はかなくてあけぬれはこの御はらからのきみ
たちそうもそくもみなうちむれてこはたへまう

て給ほとなとたれもをそくときといふはかりこそ
あれいときのふけふとはおもはさりつることそかし
とうちにおほしめしたるおほんけしきにつけて
もなをめてたかりける九条殿のおほんゆかり
かなと見えさせ給をしかへしみかとのおはしま
すにさきたちたてまつらせ給ぬるも又いとめ
てたしやと申すたくひもおほかりや五の宮はいつ丶
」（二五オ）
むつにおはしませは御服たになきをあはれなる
おほんありさまよのつねのことにかはらすすきもて
いくなかにもよろつおとろ〳〵しくこちたきさま
はいとことなりさてはうちはやかて御さうしにて
このほとはすへておほんたはふれに女御みやす
ところ御とのゐたえたりいとさまことに孝しきこ
えさせ給かくて御はうし六月十七日の程にそせさ
せ給へりける五月のさみたれにも哀にてしほと
けくらしたこのたもとにおとらぬ有さまにて
御はうしすへてつかさ〳〵の人みなゐたちさるへき
おほやけかたさまにしをきてさせ給かくて御」（二五ウ）
はうしすきぬれはそうともまかてぬみやのうち
あらぬものにひきかへたりされとみやたちおは
しませはさるへき殿上人上達部たえす此とのはら
もさふらひ給へはいみしくあはれにかなしくなんむ
もの丶こ丶ろしらせ給へるみやたちはおほんそのいろ
なともいとこまやかなるもあはれなりおほんめの
との侍従命婦をはしめとして小貳命婦佐命
婦なと二三人あつまりてつかうまつるこれはもとの
みやの女房みなうちかけたるなりけりかくいみしう
あはれなることをうちにもまこ丶ろになけき
すくさせ給程におとこのおほん心こそなをうき
」（二六オ）
ものはあれ六月つこもりにみかとのおほしめし
けるやう式部卿宮のきたのかたはひとりおはす
らんかしとおほしいて丶御文物せさせ給にきさき
の宮のおほんをと丶の御かた〳〵おとこきみたちた丶
おやとも君ともみやをこそたのみ申つるに火を

うちけちたるやうなるをあはれにおほしまとふ
かくてみやたちうちにまいらせ給にいまみやもしの
ひておはしますをあはれにかなしとみたてまつ
らせ給いみしうおかしけにめてたうおはし
ます御いかはさとにてきこしめすおほんそのいろ
ともひたみちにすみそめなりみやのきたの　」（二六ウ）
かたはめつらしき御ふみをうれしうおほしな
からなき御かけにもおほしめさんことおそろしう
つゝましうおほさるるにそのゝち御ふみしきり
にてまいり給へ〱とあれといかてかはおもひの
まゝにはいてたち給はんいかになと覚しみたるゝ
ほとにおほんはらからのきみたちにうへしのひ
て此ことをの給はせてそれまいらせよとおほせ
られけれはかゝることのありけるを宮のけし
きにもいたさてとしころおはしましけることゝ
おほすなにゝつけてもいとかなしう思ひいて聞え
給さてかしこまりてまかて給てはやうまいり」（二七オ）
給へなときこえ給へはあへいことにもあらすお
ほんことにもあらさなるをなとはすかしけにき
こえ給てこのきみたちおなし心にそゝのかしさ
るへきおほんさまにきこえ給うちよりはくらつかさ
におほせられてさるへきさまのこまかなるこ
とゝもあるへしさはとていてたちまいり給をお
ほんはらからのきみたちさすかにいかにそやうち
おもひ給へるおほんけしきともゝすゝろはしく
おほさるへしさてまいり給へり登花殿にて御
つほねしたるそれよりとして御とのゐしきりて
ことおほんかた〱あへてたちいて給はすこみや
」（二七ウ）
の女房みやたちのおほんめのとなとやすからぬこと
におもへりかゝることのいつしかとある事たゝ
いまかくはおはしますへきことかはなとことし
ものろひなとし給ひつらんやうに聞えなすも
いと〱かたはらいたしおほんかた〱にはみやのお
ほんこゝろのあはれなりしことをこひしのひき
こえ給にかゝることさへあれはいと心つきなきこ

とにすけなくそしりそねみやすからぬことにき
こえ給まいり給てのちすへてよるひるふし
おきむつれさせ給てよのまつりことをしらせ給
はぬさまなれはたゝいまのそしりくさにはこの
」(二八オ)
おほんことそありけるわたりなかりしおり
あやにくなりしにやとおほされつるおほんこゝろ
さしいましもいとゝまさりていみしうおもひ聞え
させ給てのあまりには人のこなとうみ給はさら
ましかはきさきにもすゑてましとおほしめし
の給はせてないしのかみになさせ給つ御はら
からのきんたちもしはしこそこゝろつきなしと
おほしの給はせしかおほん心さしのまことにめて
たけれはたけからぬ御ひとすしをおほすへし
をのゝみやのおとゝなとはあはれよのためしに
したてまつりつるきみのおほん心のよのすゑに
」(二八ウ)
よしなきことのいてきて人のそしられのおひ給
こと、なけかしけにまし給おほんかた〳〵たま
さかにそおほんとのゐもある登花殿のきみまい
り給てはつとめての御あさいひるねなとあさ
ましきまてよもしらせ給はす御とのこもれは
なにことのいかなれはかくよるはおほんとのこもら
ぬにかとけしからぬことをそちかうつかうまつる
おとこをんな中おもひためるかゝる程にあせち
のみやすところのおほんはらの女三の宮ことを
なんおかしくひき給ときこしめしてみかといかて
そのみやのことききかんまいらせ給へとみやす所に
」(二九オ)
たひ〳〵の給はせけれはははゝみやすところいとう
れしく覚してしたてゝまいらせ給へりうへひ
るまのつれ〳〵におほされけるにわたらせ給て
いつらみやはときこえ給へはこなたにとき
こえ給こなたにときこえ給へれはゐさりいて
給へり十二三はかりにていとうつくしけに
けたかきさまし給へりけちかきおほんけはひそ

あらせまほしきみかといつれもみこのかなしさは
わきかたうおほしめされてうつくしう見たてま
いらせ給には、みやすところにおほえ給へりと
御らんすへしみやすところもきよけにおはす」（二九ウ）
れとものおい〳〵しくいかにそやおはしてすこし
こたいなるけはひありさましてみまほしき
けはひやし給はさらんひめみやはまたいとわかくおは
すれはあてやかにおかしくおはするにおほん
ことをいとおかしうひき給へはき丶給やこれはいかに
ひき給そとの給はすれはは丶みやす所三尺の
木丁をおほん身にそへ給へるをきてうなから
ゐさりより給程なまこ丶ろつきなく御らんせ
らる丶にものとなにとみちをまかれはきやうを
そ一まき見つけたるをとりひろけてこゑを
あけてよむものは仏説のなかの摩訶の般若の」（三〇オ）
心経なりけりとひき給にこそとの給にせん
かたなくあやしうおほされてともかくもの給は
せぬほといとはすかしけなりそのおりにあさ
ましうおほされたりけるおほんけしきの世かたり
になりたるなるへしかやうなることもさし
ましりけりきさいの宮おはしまし丶九のみやな
とのおほんたいめんありしなとこそいみしうめて
たかりしかなとうへの女房たちはよるひる宮を
こひしのひきこえさするさまをおろかならす
おほかたのおほん心さまひろうまことのおほやけと
おはしましかたへのおほんかた〳〵にもいとなさけ
」（三〇ウ）
ありおとな〳〵しうおはしまし丶をそおほん
かた〳〵もこひきこえ給尚侍のおほんあり
さまこそなをめてたういみしきおほんことな
れとた丶いまあはれなることはないしのかみ
のおほんはらからのたかみつ少将ときこえ
つるはわらは名はまちをさきみときこえ
しは九てうとの丶いみしうおもひきこえ給へ
りしきみ中くうのおほんことなともあは
れにおほされて月のくまもなうすみのほ

りてめてたきを見給ひて
かくはかりへかたく見ゆる世の中に　」（三一オ）
うらやましくもすめる月かなとよみ給てそ
のあかつきにいて給てほうしになり給に
けりみかともいみしうあはれからせ給よの人も
いみしくおしみきこえさす多武峯といふ所に
こもりていみしくをこなひておはしけるに
みつはかりのをんなきみのいと〳〵うつくしき
そおはしけるそれそなを覚しすてさりけ
るたふのみねまてこひしさはつゝきのほり
けれはは、きみの御もとにそれによりてそ
をとすれきこえ給けるかのちこきみも屛風
のゑのおとこを見ては、とてそこひきこえ　」（三一ウ）
給けるこれは物かたりにつくりてよにあるやう
にそきこゆめるあはれなることにこのことを
そ世にはいふはかなくとし月もすきてみかと
世しろしめしてのち廿年になりぬれはお
りなはやしはしこゝろにまかせてもありにし
かなとおほしの給はすれとときのかんたちへ
たちさらにゆるしきこえさせ給はさりけり
康保三年八月十五夜月のえんせさせ給はん
とてせいりやうてんのおほんまへにみなかたわかち
てせんさいうへさせ給ふ左の頭に絵所別當
蔵人少将済時とあるは小一条のもろたゝのお」（三二オ）
とゝのみこいまの宣耀殿の女御の御せうとなり
右の頭にはつくもところの別當右近の少将
ためみつこれは九条殿の九郎きみなり
おとらしまけしといとみかはして絵所のかた
にはすはまをゑにかきてくさ〳〵のはな
おひたるにまさりてかきたりやりみすい
はほみなかきてしろかねをませのかたにして
よろつのむしともをすませ大井にせうえう
したるかたをかきてうふねに火ともしたる
かたをかきてむしのかたはらにつくもところ
のかたにおもしろきすはまをゑりてしほ　」（三二ウ）
みちたるかたをつくりていろ〳〵のつくり

はなをうへまつたけなとをゑりつけて
いとおもしろしか〻れともうたはをみなへし
にそつけたる左方
きみかためはなうへそむとつけねとも
ちよまつむしのねにそなきぬる右方
こ〻ろしてことしはにほへをみなへし
さかぬはなそと人はみるとも御遊ありて
上達部おほくまいり給て御ろく様々なり　」（三三オ）

（挿絵2）

これにつけてもみやのおはしまし〻おりにいみ
しくことのはへありておかしかりしはやと
うへよりはしめたてまつりて上達部たち
こひきこえめのこひ給はなてふにつけても
いまはた〻おりなはやとのみそおほされける
とき〳〵につけてかはりゆくほとに月日も
すきて康保四年になりぬ月ころうちにれい　」（三三ウ～三四オ）

ならすなやましけにおほしめしておほんもの
わすれなとしけしいかにとのみおそろしうお
ほしめす御讀経御修法なとあまた壇をこ
なはせ給か〻れとさらにしるしもなしれいの」（三四ウ）
もとかたの霊なともまいりていみしくの〻しるに
なをよのつきぬれはこそかやうのこともあらめ
とこ〻ろほそくおほしめさるかねてはおりさ
せ給はまほしくおほされしかといまになり
てはさはれおなしくは位なからこそとおほさる
へしおほん心ちいとをもけれはをの〻みやの
おと〻しのひて奏し給非常のこともおはし
まさは東宮にはたれをかとおほんけしき給
はり給へは式部卿のみやをとこそおもひしかと
いまにをきてはえゐ給はし五のみやをなむ
しかおもふとおほせらるれはうけ給はり給ぬ」（三五オ）
御悩まことにいみしけれはみやたちおほんかた〳〵
みななみたをなかし給もおろかなりそのなかに
もないしのかみあはれに人わらはれにやとおほ

しなけくさまことはりにいとおしけなりさ
れとつゐに五月廿五日うせ給ぬ東宮くらゐ
につかせ給あはれにかなしきことたとへん
かたなしめてたうてりかゝやきたる月日のお
もてにむらくものにはかにいてきておほひた
るにこそにたれ又こゝのへのうちのともし火を
かいけちたるやうにもありあさましういみしと
もよのつねなりこゝらの殿上人上達部たち」（三五ウ）
あしてをまとはかしたりわかきみの御やうなる
きみにはいまはあひたてまつりなむやわれも
をくれたてまつらし〳〵とあしすりをしつゝそ
なき給東宮のおほんことまたともかくもなき
によの人みなこゝろ〳〵におもひさためたるも
おかしおとゝはみなしりておはすめるものを
とよろつ御のちのことゝもいといみし御さうそう
のよはつかさめしありて百くわんをゝしかへ
してこのみちかのみちとあかちあてさせ給に
つねのつかさめしはよろこひこそありしかこ
れはみななみたをなかすもけにゆゝしくかな」（三六オ）
しうなん見えけるいつれの殿上人上達部かは
のこらんとするかすをつくしてつかうまつり
給殿上には人たゝすこしそとまれるむらかみ
といふところにそおはしまさせけるそのほとの
ありさまいはんかたなし夏の夜もはかなく
あけぬれはみなかへりまいりぬいみしけれとも
おりゐのみかとのおほんことはたゝ人のやうに
こそありけれこれはいと〳〵めつらかなる見もの
にそ世人申おもひけるそのゝちつき〳〵の御
ことゝもいみしうめてたき御ことゝ申せともおな
しやうにて月日もすきぬ宮〳〵おほんかた〳〵」（三六ウ）
のすみそめともあはれにかなしおなし諒闇な
れとこれはいと〳〵おとろ〳〵しけれはたゝ一天下
の人からすのやうなりよもやまのしゐしはの
こらしと見ゆるもあはれになんことゝもみな
はてゝすこしこゝろのとかになりても東宮の

おほんこと有へかめる式部卿宮わたりには人
しれすおと丶の御けしきをまちおほせとあへて
をとなけれはいかなれはにかとおほんむねつ
ふるへし源氏のおと丶もしさもあらすはあさま
しうもくちおしうもあへきかなとものおもひに
おほされけりか丶る程に九月一日東宮たち給」（三七オ）
五のみやそた丶せ給ふおほんとし九にそおはし
けるみかとのおほんとし十八にそおはしまし
けるこのみかとた丶せ給おなし日女御もきさ
きにた丶せ給て中宮と申昌子内親王とそ申
つるかし朱雀院の御こ丶ろをきてをほいかな
はせ給へるもいとめてたし中宮のたいふに
は宰相ともなりなり給ぬ東宮大夫には中納言
師氏傅には小一てうのおと丶なり給ぬみな九条
殿のおほんはらからのとのはらにおはすかし
た丶し九条殿の君たちはまたおほんくらゐと
もあさけれはえなり給はぬなるへしみかとれい
」（三七ウ）
のおほんこ丶ちにおはしますおりはせんていにいと
ようにたてまつらせ給へるおほんかたちこれは
いますこしまさらせ給へりあたらみかとのお
ほんもの丶けいみしくおはしますのみそよに心
うきことなることしは御禊大嘗會なくて
すきぬか丶る程におなしとしの十二月十三日
をの丶みやのおと丶太政大臣になり給ぬ源氏の
右のおと丶左になり給ぬ右大臣には小一条のおと丶
なり給ぬ源氏のおと丶くらゐはまさり給へれと
あさましくおもひのほかなる世の中をそ
こ丶ろうきものにおほしめさる丶程にとしもかへ
」（三八オ）
りぬことしはねんかうかはりて安和元年といふ
正月のつかさめしにさま〴〵のよろこひともあ
りて九条殿の御太郎伊尹のき大納言に
なり給ていとはなやかなる上達部にそおは
する女君たちあまたおはすおほひめきみうちに
まいらせ給はんとていそかせ給といふことあり

二月にとそおほしこゝろさしけるこれをきこ
しめして中宮もさとにしはしいてさせ給うへの
おほんものゝけのおそろしけれはこのみやもさと
かちにそおはしましける二月ついたちに女御
まいり給その程のありさまをしはかるへし　」（三八ウ）
みかといとかひありてときめかせ給程にいつし
かとたゝにもあらぬおほんけしきにてものし
給そいとゝゆゝしくちゝ大納言むねつふれておほ
されけるおほんいのりをつくし給みかともいと
うれしきことにおほしめしたりみつきになり
ぬれはことのよしそうしていてさせ給程いみ
しくめてたしこれにつけてもなを九条殿を
そありかたきおほんさまにきこえさすめるさて
さとにいて給へるほともうちよりおほつかなさを
おほしきこえさせ給中宮うちにいらせ給へり
中宮のおほんかたのありさまむかしも今もなを
　　　　　　　　　　　　　」（三九オ）
いとおくふかくこゝろことにやむことなくめてた
しこそはよの中の人すみそめにてくれにしかは
こそ御禊大嘗會なとのゝしるめれさま〳〵に
めてたきことおかしきことあはれにかなしきこと
おほかめり伊尹大納言一てうにすみ給へは
一条とのとそきこゆるその女御世の中の大事
いそきともはてゝすこしのとかになりてみこ
うみたてまつり給へりおとこみこにおはすれ
はよにめてたきことにおもへり御うふやの程
のありさまいへはをろかなりおほきおとゝを
はしめたてまつりてみなまいりこみさはき　」（三九ウ）
たり七日の夜はくはんかくゐんの衆ともみなまい
り式部民部のつかさみなまいりこみたり
一天下をしろしめすへききみのいて給へると
よろこひおかみたてまつるおほちの大納言の
おほんけしきいみしうめてたし九条殿この比
六十にすこしやあまらせ給はましとおほすに
もおはしまさぬをかうやうのことにつけても
くちおしくおほさるへし七日もすきつき〳〵

の御いかのおほんありさまいはんかたなし源氏のお
とゝは式部卿宮の御ことをいとゝへたておほかる
こゝちせさせ給へしみやの御おほえのよになうめ
」（四〇オ）
てたくめつらかにおはしましゝも世の中の
ものかたりに申おもひたるにさしもおはし
まさゝりしことはみなかくおはしますめりみ
かとゝ申ものはやすけにて又かたきことに見ゆ
るわさになんありける式部卿宮のわらはにお
はしましゝおりのみこ日の日みかときさきもろ
ともにゐたゝせ給ていたしたてまつらせ給し
ほとおほんむまをさへめしいてゝ御まへにて御よ
そひをかせなとしてたかいぬかひまてのありさ
まを御らんしいれてこき殿のはさまよりいて
させ給し御ともに左近中将しけみつ朝臣 」（四〇ウ）
蔵人頭右近中将延光朝臣式部大輔保光朝臣
中宮権大夫かねみちあそん兵部大輔かねいゑ
あそんなといとおほくおはしきやその君たち

あるはきさきの御せうとたちおなしき君
たちときこゆれとえんきのみこなかつかさの
みやのおほんこそかしいまはみなおとなになりて
おはするとのはらそかしおかしき御かりさうそ
くともにてさもおかしかりしかなふなをかに
てみたれたはふれ給しこそいみしき見もの
なりしかきさいのみやの女房くるまみつよつ
にのりこほれてをほうみのすりもうちいたし」（四一オ）
たるにふなをかのまつのみとりもいろこく
ゆくすゑはるかにめてたかりしことそやと
かたちつくるをきくもいまはおかしうそ四の
みやみかとかねと申おもひしかといすらは源氏の
おとゝのおほんむこになり給しにことたかふ
と見えしものをやなとよにある人あいなきこと
をそ御ものゝけいとおとろ〳〵しうおはしませは
さるへき殿上人とのはらたゆますよるひるさふ
らひ給いとけおそろしくおはしますにけふ
おりさせ給あすおりさせ給とのみきゝにくゝ

申おもへるにみかと丶申ものは一たひはのとかに
一たひはとくおりさせ給といふこともかならす」（四一ウ）
あるへきことに申おもへるにことしは安和
二年とそいふめるにくらゐにて三とせにこそは
ならせ給ぬれはいかなるへき御ありさまにかと
のみ見えさせ給へりか丶るほとによの中にいと
けしからぬことをそいひいてたるやそれは源氏
の左のおと丶の式部卿宮の御ことを覚してみかと
をかたふけたてまつらんとおほしかまふといふ
ことといてきてよにいときゝにくゝの丶しるいてや
よにさるけしからぬことあらしなとよ人申おもふ
ほとにふつしんの御ゆるしにやけに御こ丶ろの
中にもあるましき御こ丶ろやありけん三月廿」（四二オ）
六日にこの左大臣殿にけひいしうちかこみて
宣命よみの丶しりてみかとをかたふけたてま
つらんとかまふるつみによりてたさいこんのそつ
になしてなかしつかはすといふことをよみの
のしるいまは御くらゐもなきちやうなれは
とてあしろくるまにのせたてまつりてた丶
いきにゐてたてまつれは式部卿宮の御こ丶ち
おほかたならんにてたにいみしとおほさるへきに
まいてわか御ことによりていてきたること丶お
ほすにせんかたなくおほされてわれ〳〵もと」（四二ウ）
いてたちさはかせ給きたのかたの御むすめ
おとこきみたちいへはをろかなるとの丶
うちのありさまなりおもひやるへしむかし
すかはらのおと丶のなかされ給へるをこそ
よのものかたりにきこしめししかこれはあ
さましういみしきめをみてあきれまとひ
てみな丶きさはき給もかなしおとこ君たち
のかふりなとし給へるもをくれし〳〵しと
まとひ給へるもあへてよせつけたてま
つらすた丶あるかなかのおと丶にてわらは
なるきみのとの丶御ふところはなれ給はぬ」（四三オ）

そなきのゝしりてまとひ給へはことの
よしそうしてさはれそれはとゆるさせ給
をおなし御くるまにてたにあらすむま
にてそおはする十一二はかりにそおはし
けるたゝいま世の中にかなしくいみしき
ためしなる人のなくなり給れいのこと
なりこれはいとゆゝしうこゝろうしたいこ
のみかといみしうさかしうかしこくおはし
ましてひしりのみかとゝさへ申しみかとの
一のみこ源氏になり給へるそかしかゝる御あ
りさまはよにあさましくかなしうこゝろ」（四三ウ）
うきことによに申のゝしるしきふきやうの
みやほうしにやなりなましとおほせと
おさなきみやたちのうつくしうておはし
ますおほきたのかたのよをいみしきものに
おほいたるもたゝいまはみやひとゝころの御
かけにかくれ給へれはえふりすてさせ
給はすいみしうあはれにかなしとも世の
つねなりすませ給みやのうちもよろつに
おほしむもれたれはおまへのいけやり水も
みくさゐむせひてこゝろもゆかぬさまなり
さま〳〵にさはかりうへあつめつくろはせ」（四四オ）
給しせんさいうへ木ともゝまかせておひあ
かりにはもあさちかはらになりてあはれ
にこゝろほそしみやはあはれにいみしと
おほしめしなからくれやみにてすくさせ
給にもむかしの御ありさまこひしうかなしう
て御なをしのそてもしほりあへさせ給は
すいきなから身をかへさせ給へるそあはれに
かたしけなき源氏のおとゝのあるかなかのお
とゝのをんなきみのいつゝむつはかりにおは
するはおとゝの御はらからの十五のみやの御
むすめもおはせさりけれはむかへとりたて」（四四ウ）
まつり給てひめみやにてかしつきたてまつ
り給てやしなひたてまつり給それにつけ
てもいとあはれなるものはよなりけりそち

とのはほうしになり給へるとそきこゆめる
はかなく月日もすきてことかきりあるにやみ
かとおりさせ給とての、しる安和二年八月十
三日なりみかとおりさせ給ぬれは東宮くらゐに
つかせ給ぬ御年十一なり東宮におりゐの
みかとの御このちこみやゐさせ給ひぬ師貞親王
なり伊尹の大納言の御さいはひいみしくおは
しますおりゐのみかとは冷泉院にそおはし　（四五オ）
ますされは冷泉院ときこえさす東宮の御
としふたつなりおほきおと、摂政のせんし
かうふり給ぬ師尹のおと、は左大臣にておは
す御禊大しやうゑなと、いとちかうなれは世の
人さはきたちたりか、るほとに小一条の左大臣
ひころなやみ給ける十月十五日御年五十にて
うせ給ぬとの、しる宣耀殿女御おとこきん
たちよりはしめてよろつにおほしまとふ
いまの摂政殿の御はらからなれは御ふくにならせ
せ給へは大しやうゑのおりのこといとくち

をしうおほせとなとてか御おとうとなれは　」（四五ウ）
一月の御ふくこそあらめなと
さためさせ給もあはれなるよの中なり
れいのありさまともありてはかなく
としもくれぬれはいまのうへわらは
におはしませはつこもりのついな
に殿上人ふりつ、みなとして
まいらせたれはうへふりけうせさせ
給もおかしついたちになり
ぬれは天禄元年といふ
めつらしきおほん有
さまにそへて空の　」（四六オ）
けし
き
も
こ、ろ
こと
なり

（挿絵3）　」（四六ウ～四七オ）

小一条のおと、のかはりのおと、には在衡のおと、
なり給へるをはかなくなやみ給て正月廿
七日うせ給ぬおほんとし七十八としのはしめに

いとあやしきことなりさるへきとのはら御つゝ
しみあり右大臣にて伊尹のおとゝおはす摂政
殿もあやしうかせおこりかちにておはしまして
うちにもたはやすくまいり給はすいかなるにかと
おほしめすをの、みやのおとゝ非常のこともおはし
まさはこの一条のおとゝ世はしらせ給へしとてさ
るへき人〳〵しのひてまいるこのおほきおとゝの
二郎はたゝいまの左大将にてよりたゝとておは
」（四七ウ）
す摂政殿の御なやみいとおもくおはしまして
まめやかにくるしうなりもておはしまし御
としなともおとろへ給へれは人いかにとそ申
おもへる御はらからのとのはらはうせもておはし
にたるにかくひさしくよをたもたせ給へるも
いとおそろしよろつ御こゝろのまゝにつゝし
ませ給よこそりてさはけとも人の御いのち
はすちなき事なりけれは五月十八日にうせ
給ぬのちの御いみな清慎公と聞ゆ左大将よりたゝ
に世をもゆすりきこえ給はてありのまゝにて
うせさせ給ぬる御こゝろさまいとありかたし御年
」（四八オ）
七十一にそならせ給けるあはれにかなしき世の
ありさまなり七月十四日もろうちの大納言うせ
給ぬ貞信公のみこおとこきみ四ところおはし
けるみなうせ給ぬ御とし五十五にておはしまし
けるかゝる程に五月廿日一条のおとゝ摂政の
宣旨かうふり給て一天下わか御こゝろにおはし
ます東宮の御おほちみかとの御おちにていと〳〵
あるへきかきりの御おほえにてすくさせ給この
御ありさまにつけても九てうとのゝ御有さま
のみそなをいとめてたかりける左大臣に源氏
の兼明ときこゆるなり給ぬこれにたいこのみかと
」（四八ウ）
の御子におはして姓えてたゝ人にておはしつる
なりけり御てをえもいはすかき給道風なと
いひけるてをこそはよにめてたきものにいふめれ

とこれはいとなまめかしうおかしけにかゝせ給へり
右大臣にはをのゝみやのおとゝのみこよりたゝなり
給ぬかくいふ程に天禄二年になりにけりみか
と御とし十三にならせ給にけれはおほん元服の
ことありけり九条殿の御次郎きみとあるは
いまの摂政殿の御さしつきなりかねみちとき
こゆるこのころ宮内卿ときこゆその御ひめきみ
参らせたてまつり給摂政殿のひめきみたちは」(四九オ)
またいとおさなくおはすれはえまいらせ給はす
いとこゝろもとなくくちおしくおほさるへし
宮内卿はほりかはなるいゑをいみしくつくり
てそすませ給ける女御いとおかしけにおはし
けれはうへいとわかき御こゝろなれと思ひきこえ
させ給へるうちにはひとつ御はらの女九の宮せん
ていいみしうおもひきこえ給へるをこのいまの
うへもいみしうおもひかはしきこえさせ給て一ほんに
なしたてまつり給へりうちのいとさう〳〵し
きにおかしくておはします女十のみやこの御時

に斎院にゐさせ給にけり九条殿の御三郎」(四九ウ)
かねいゑの中納言ときこゆるいみしうかしつき
たてゝひめきみ二ところおはすたゝいまの東宮
はちこにおはしますうちにはほりかはの女御さふ
らひ給きほひたるやうなりとて冷泉院に此
ひめきみをまいらせたてまつり給をしたかへたる
ことによの人申おもへり摂政殿の女御ときこゆる
は東宮の御はゝにようこにおはすその御ひとつ
はらにをんな宮ふたところむまれ給にけりされと
女一の宮はほとなくうせさせ給て女二の宮そおはし
ましけるそれは院のくらゐにおはしましゝ
おりならねとのちにむまれ給へるいみしううつ」(五〇オ)
くしけにひかるやうにておはしましけり東宮
かくておはしませはとき〳〵こそみたてまつ
りまいらせ給へたゝこのひめみやをよろつ
のなくさめにおほしめしたりかゝるほとにかの
むらかみのせんていの御おとこ八の宮宣耀殿の

女御の御はらのみこにおはしますいとうつくしく
おはしませとあやしう御心はへそこゝろえぬさま
におひいて給める御おちの済時のきみいまは
宰相にておはするそよろつにあつかひ聞え
給て小一条のしんてんにおはするにこの宰相
はひはの大納言延光のむすめにそすみ給ける」（五〇ウ）
はゝは中納言あつたゝのおほんむすめなりえもい
はすうつくしきひめきみさゝけものにしてかし
つき給かの八のみやははゝ女御もうせ給にしかは
この小一条の宰相のみそよろつにあつかひ
きこえ給にまたおさなきほとにおはすれと
この八のみやいとわつらはしきほとにおもひき
こえ給へれはゆゝしうてあへて見せたてま
つり給はすなりにたりおさなきほとはうつ
くしき御心ならてうたてひか〳〵しくしれは
みてまたさすかにかやうの御心さへおはするを
いと心つきなしとおほしけり宰相の御をひの」（五一オ）
さねかたの侍従も此宰相をおやにしたてまつり給此

ひめ君の御あにゝておとこ君は長命君といひて
おはすおはきたのかたとりはなちてひは殿にて
そやしなひたてまつり給けるその君たちもたゝこの
みやをそもてわらひくさにし奉り給けれはとも
すれはうちひそみ給をいとゝおこかましきことに
わらひたてまつり給へるにくさは姫君をいとめ
てたきものに見奉り給てつねに参り給
けるを宰相むけに心つきなしとおほしなりに
けりこの八のみや十二はかりにそなり給にける此
御心さまの心えぬなけきをそ宰相はいみしうお
」（五一ウ）
ほしたるさねかた侍従長命君なとあつまり
てむまにのりならはせ給へのらせ給はぬはいと
あやしき事なり宮たちはさるへきおり〳〵はむま
にてこそありかせ給へとてみまやの御馬めし出て
おまへにてのせ奉りてさゝとみさはけはおもていとあ
かくなりて馬のせなかにひれふし給へはいみしうわらひ
のゝしるを宰相かたはらいたしとおほすにいたきおろし

奉れおそろしとおほすらんとの給へはさゝとわらひ
の、しりていたきおろし奉りたれはむまのかみを
ひとくちく、みておはするを宰相いとわひし
と見給女房たちなとわらひのゝしる　」（五二オ）

（挿絵4）

かゝる程に冷泉院のきさいの宮みこもおは
しまさすつれ〳〵なるをこの八のみや子にしたて
まつりてかよはし奉らんとなんの給はするといふ
ことを宰相つたへきゝ給ていと〳〵うれしう
めてたきことならんかの宮はたからいとおほく
もたせ給へる宮なり故朱雀院の御たからものは
たゝこのみやにのみこそあんなれこのみやは幸
おはするみやなりたからのわうになり給なん
とすとてよき日してまいりそめさせ給へり
中宮さりともかの小一条の宰相をしへたて
たらむこゝろのほとこよなからんとおほしてむか
へたてまつらせ宰相いみしうしたてゝゐてた
てまつり給へれは見たてまつり給に御かた
ちにくけもなし御くしなといとおかしけにて
よおろはかりにおはしますうつくしき御なをし
すかたなりややかてよひいれたてまつらせ給て
みなみおもてのひのおましのかたにかしつきすへ
奉らせ給て御とものの人々にかつけもの給ひ御
をくりものなとしてかへしたてまつらせ給もの
なと申させ給けるにすへて御いらへなくてたゝ
御かほのみあかみけれはかきりなくあてにおほ
とかにおはするなめりとおほしけりそのゝち
とき〳〵参り給になをものゝ給はすあやしう
おほしめすほとにきさいのみやなやましうせ
させ給けれは宰相みやの御とふらひにいたしたて
まつらせ給まいりてはいかゝいふへきとの給はすれ
は御なやみのよしうけたまはりてなんとこそは
申給はめなとをしへられてまいり給へれはれいの

よひいれたてまつり給にありつることをいとよくの
給はすれはみやなやましうおほせとうつくしう
おほしめしてさはのとかに又おはせよなと
きこえさせ給まかて給て宰相にありつる事
いとよくいひつとの給へはいてあなしれかましや
」(五四ウ)
いとこゝろつきなうおほしていかていひつとは
申給そそれはかたしけなき人をと聞え給へは
をい〳〵さなり〳〵との給ほといたはりところなう
心うく見えさせ給をわひしうおほす程に天禄三
年になりぬついたちにはかのみや御さうそくめて
たくしたてゝみやへいらせ奉り給きこえ給へ奉
り給はすなりにけりみやには八のみやまいらせ給
て御まへにてはいし奉給へはいと〳〵あはれに
うつくしと見奉らせ給心ことに御しとねなとま
いりさるへき女房たちなと花やかにさうそき
つゝいてゐていらせ給へと申せはうちふるまひいら
」(五五オ)

せ給ほといとうつくしけれはあなうつくしや
なとめてきこゆるほとにしとねにいとうるはしく
ゐさせ給てなにことをきこえ給へきにかとあつ
まりてあふきをさしかくしつゝをしこりてみな
ゐなみてかつはあなはつかしや小一条のひめきみ
の御かたのいみしからんものをなときこえあへる程
にうちこはつくりて申いて給ことそかしいと
あやし御なやみのよしうけ給りてなんまいりつ
ることゝ申給ものかこその御なやみのおりに参り
給へりしに宰相のをしへきこえ給しことを正月
のついたちのはいらいにまいりて申給なりけり
」(五五ウ)
みやの御まへあきれてものもの給はせぬに女房
たちなにとなくさもわらふよかたりにもしつ
へきみやの御ことはかなとさゝめきしのひもあへす
わらひのゝしれはいとはしたなくかほあかみて
ゐ給ていなやおちの宰相のこその御心ちのおり
まいりしかはかう申せといひしことをけふはいへは

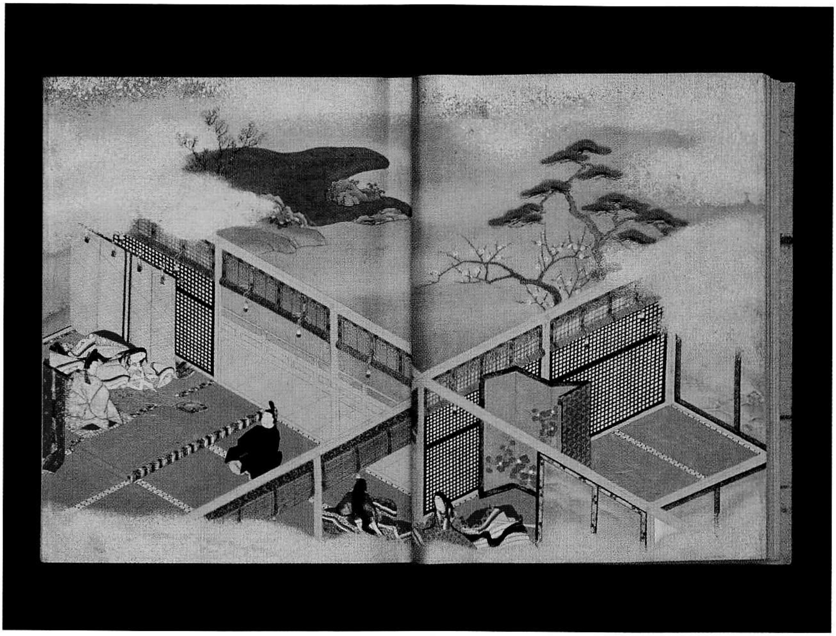
なとこれかおかしからんものわらひいたうしける
女房達おほかりけるみやかなやくなしまいら
しとうちむつかりてまかて給有さまあさま
しうおかしうなる　」（五六オ）

（挿絵5）

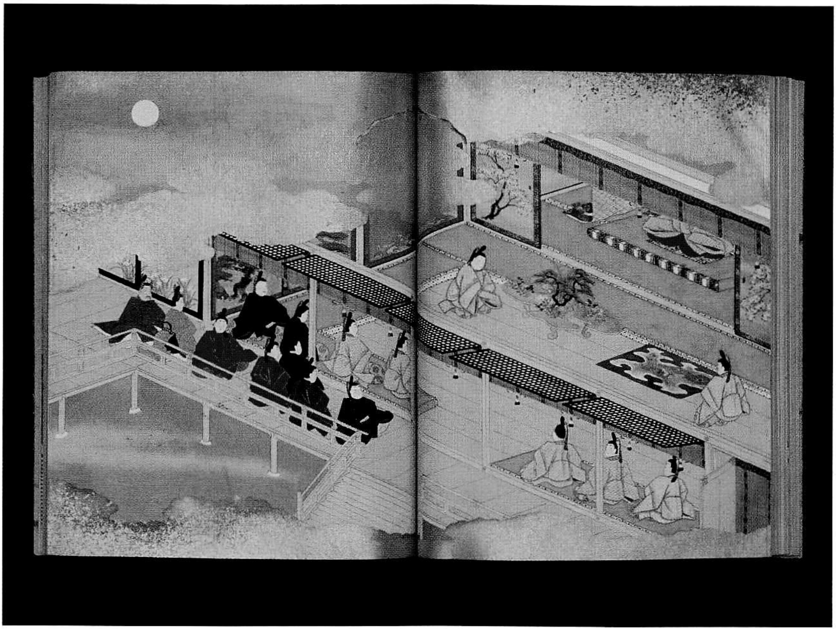
小一条におはしてあさましきことこそあり　」（五六ウ～五七オ）
つれとかたり給へは宰相なにことにかと
きこえ給へはいまはみやにすへてまいらし
たゝころしにころされよとの給はすれはいな
やいかにはへりつることそときこえ給へは
御なやみのよしうけ給はりてなんまいりつると
申つれは女房の十廿人といてゐてほゝとわらふ
そやいとこそはらたゝしかりつれされはいそき
出てきぬとの給へはとのいとあさましういみし
とおほしてすへてものもの給はすいなやとも
かくもの給はぬはまろかあしういひたることかこ

」（五七ウ）

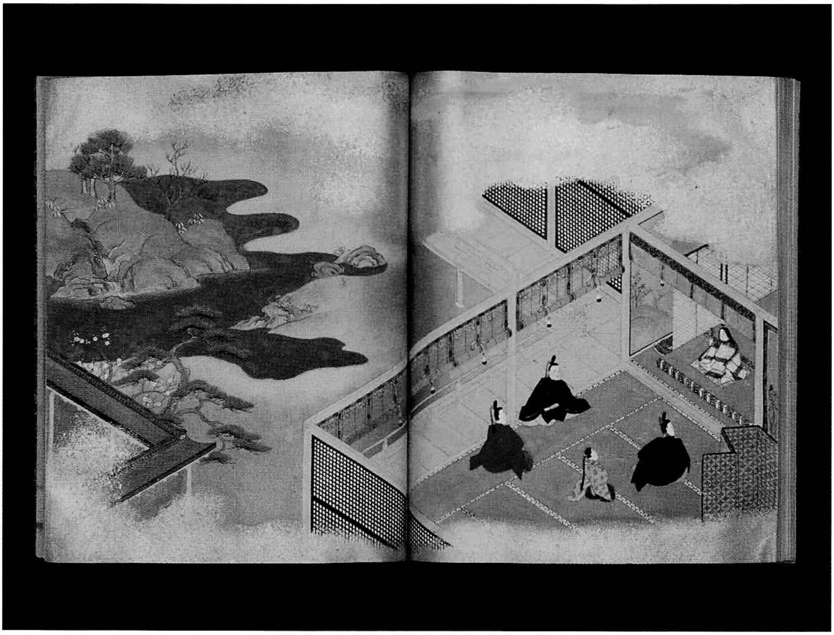
そまいりしにさ申せと
の給しかはそれを
わすれす申たるは
いつくのあしきそと
の給をいみし
とおほし
いりた
めり　」（五八オ）



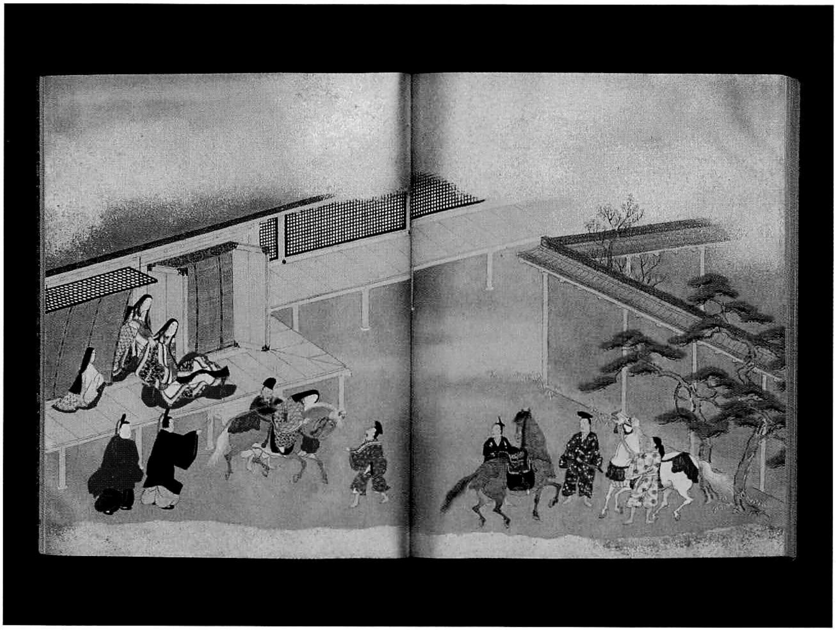
〔図1〕常磐松文庫蔵奈良絵本『栄花物語』巻一・挿絵1



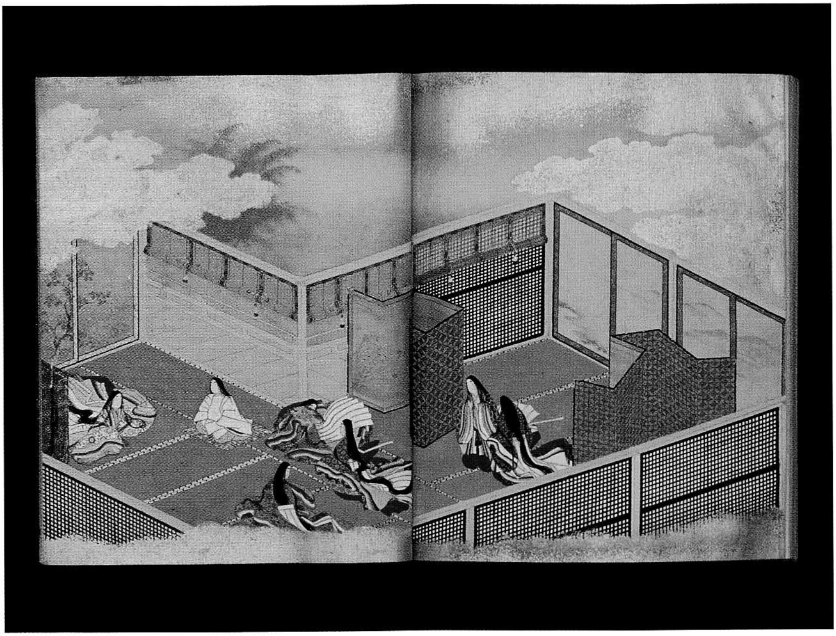
〔図2〕同『栄花物語』・挿絵2



〔図3〕同『栄花物語』・挿絵3



〔図4〕同『栄花物語』・挿絵4



〔図5〕同『栄花物語』・挿絵5